「私の心の中にある辞書はかの皇帝ナポレオン・ボナパルトと同一のものよ」
「じゃあ僕はタレイランか……ジョゼフィーヌか」
「……どうかしら。あなたが在りたいほうでいるのがいいのではないかしら」
夕暮れ。図書室での受験勉強終えた帰路。夕闇に染まる堤防上の道を、県内有数の進学校の制服を着た男女が並んで歩く。影が重なるような近さだ。
上流の方に夕陽がほとんど沈みかけている様が伺える。綺麗な光景だった。
しかしふたりはそちらを気にも留めなかった。見慣れている、などという陳腐な理由ではない。そんな理由であればふたりは互いにとうの前に関心を失っている。
ふたりは赤子の頃から縁の続く幼馴染だった。
急に、言外に「不可能はない」と言ってのけたのは高飛車な態度が目に余る女だった。しかし彼女は幼馴染の異性の言葉に、僅かにだがうろたえていた。
「じゃあ、まだタレイランでいよう」
男は表情を変えることなく言った。感情の揺れはなく、淡々としている。
ふたりの普段の関係性は基本的に女有利の場合が九分九厘だった。男の方がいつだって振り回されていた。女の破天荒さに、いつだって男が息切れを起こすのだった。しかし、たまに今のようなことがあった。このようなこと、というのは、ふとした瞬間の切り返しに女の方が意表を突かれる、というものだ。
女はそんな自分を自覚していた。いつか、機会さえあれば必ず切り返してやろうと思っていた。そして、それは今だと確信した。
「マリアがいつか現れるかも知れないわね」
それは脅しとも催促とも言えた。
「受験が終わるまでに現れるとも思えないな」
それは宣言だった。
「……えっ？」
女は固まり、真面目を濾したような表情を完全に破顔させた。
「えっと、それって」
「ほら、早く帰ろ。もう陽も沈むし」
男は幼馴染の破顔した表情をなんでもないような顔で網膜と意識に焼きつけながら、さ行こ、と促す。そして控えめに、大きすぎる勇気を以って手を差し出す。
女は嬉しそうに目を輝かせ、赤ん坊のような純粋無垢な笑顔でその手を取った。
付かず離れずだった影は重なった。陽がすぐに沈んでふたりの表情が見えなくなってしまったが、それはたしかだった。
彼女はナポレオンの持っていた辞書を自分も持っていると豪語し、彼はそれに応じた自称をしたが、よりかかって歩く彼女の方がジョゼフィーヌに見えるのは万人共通だろう。